替色辰巳園

へ13
2907
2

序

千艘の出舟あまた萬艘の入舟所名所

漆の夕景色道かたかたゝ踏まけて陸奥

のゝ時里の宜を定めうゝ筆の綾實千

作者の黒江町小本市の屋行先生拙

うの舊れ閑文吉利市の大當り

門へ13
2907
2
昭和九年七月十八日
購求

恵みを乞ふ矢も石も尾ゝの風
俗通 立橋仲所 矢倉と綿の四ぢ人百
類 あゝぶよく人情 丸太島所 眉毛
好しとす用いる 化粧 稲荷
横所 乳仕 自身番横
所 自身 異見 新造

新の 姫 童子 横所 金ぐすり 嬢女
女郎の 山 地 居 人 部屋
部屋の 吸 硬 弱 張
葉 心 彼 家 切
客の 仏 貴 嫌 親 里
らくだひの舟の 塩 ぶらひ

明日、程深くさぐり、屋島の国さと峰出されば、二海月々行き来あるを縁宜敷
咲くふ姫今の言葉を聞くもなつかしく
青々とあるを知らぬ清水ぶり送り迎ひの船
の中枝藏こうまひの屋島の月花芳
葉ろれをり花ろの脈ぐ仕ぶまを明か

寄と虚賞中を直さ付けて序
文を頼て紅洲亭が川岸を付られ摂川
久々ぶり嵐の風氣の庵上陸ひ山き方へ乗
出さんはの内ふぐり筆を採
屋島拙人 善孝誌

紀貫之

清元延津賀

夕霧伝人を
情乳母
さん蔵
たゝえや
高橋屋
三孝
米八

梅暦餘興 春色辰巳園巻の四

江戸 狂訓亭主人著

此書籍ヲ貴却又ハ質入シト大ル者アル時ハ直チニ御報知ヲセヲ
津田安磨

第七回の上

塩竈の小赤貝少々とゑども云地に来りて見る潮干狩
附録の自慢ちらく絶るとなき流行妓今朝見家の新妓
わるくち方ちらく自家のりあるホ向狐の通も濟しまた
ゑどの上人達が軒を並べ〜新乃を稲荷の横町とゝ呼ぶ
所より延てゝ中年始彼場者が中のるに今日も拾んぐく仇

今此経目爲の氣保喜寿の相同志とて縁切な親子も
和合媒者が「サア蓉がものではヨ母人此所へおくぜ ト湯呑へ
注いで蓉にいだせば 母「アイ/\ 仇「母さんお待ヨ今奴が女子
媒「ヨヤそうぶつけのう母人今仇さんが奴を越後屋へやつた
うら美味ものが有るヨわけくきかつたト湯呑に寄かかると母
親ハ角ばいだし 母「アイ/\一盃呑ぐ咽にて喜ましておめく
ト笑ひ臭から蓉にのむ 媒「そう/\そんな事も行と注が今仇さん
サア蓉はいやう 仇「何いそのサ 蓉ハ茶酒ハ酒ごア お 媒「そんな女房ハ
女房情人ハ情人さだうしても嬉しいふ事がいてもんどの
仇「其の母さく 遂切まこの年トいふ折から十二の小女子糸
びん奴の父素髪のまけ銭よつちやうにかげがらくしと膝子
を酒作出子父入り喘息いつく来りしが 小「ハイ仇吉さん ト出
て座敷く息ぜしく入る 仇「アイヨ此くろうく サア母に 媒「おりの
とマア奴がどうしうんざる 小「それぶつてもあんまり久
しくまこせて驚きヤアかかの種が喜そく思いも小僧と喧
嘩しくだて出てかく迯たけく来やアが川この銭 媒「

とまるがきでよ切ると堂屋アしく書くどうも書く極へ仇
ナニサそうじゃア娘やアおまいつうゞ待どんざろうとちまいく
ざのう〳〵アイトさげけ之新をしく座る　作者曰えちのこと
ちらくちらくいやこうくしく法ろ分ちまいもの　丗〳〵サアく〳〵
たばの風ありあるぢら今もあるとのふまあるぞこ
こんこのるのざドレく〳〵老人ぢちでめるものゞ仇〳〵そうよのう
母はさんとおよりサア娘さんどうざ娘〳〵いのサ其いのもこる
ウア娘ト縁こうかんと極製のかたてく庵丁貝紙入まこく
長へ縁ぢりにせ一切とろく娘〳〵ヨヤく〳〵ぞん世へ参切娘ざ

もく〳〵後と酒のあるざろうこまこうしく寄ろ仇〳〵酒のこりの
ろど後こまへ娘〳〵ちげへ娘〳〵縁こうかんより山蔵法のろうが
ものう母〳〵ぞんざおこのるへ一人ぞくそんるふせへ出ぞとこくふる
こ世のきこと娘〳〵ナムウ母への塗ふのゞ少くこると娘〳〵長
後ざの母〳〵ちさけあさんを外女のこりいこくまこに乞かり
きうア仇さんあへこりのの我婦姉ゞんこくいのるのショト笑へ
仇者もこくこんあゞこ〳〵仇〳〵そこんゞこく〳〵ヨ娘さんこを
仕合世ざりんに母はのまうあさけゞ人を言ショ娘〳〵ナニそふゞも

其時は愚痴をいふ折もあらず子さまでかその愚痴が人の不届

ぬしのヨ此方も何か言がら嫡言は「アヽモウ〳〵死んでくれも

言なひで〳〵おかまいなさへトいつて私がヨヤ母人何がそんなにお前

そく〳〵死ね殺のことが有るといつてもその何もいつておらぬ夫から

て自兄でおかしく言ものでは吹出して笑ひものサそれだから

の此方兄さんが来て時何か私のことを悪くいつつけると云て性分

ではからずもの子言てこのんではなし兄さんがおかしがつて

笑ひではゐ〳〵とまでのもまあ〳〵おや〳〵逢て親を悪するよと云て

騒を立る兄さんがいはませんからあれもお姉様がこうしてめの

たがふに座敷へでも出して窮屈な目をさしてやろうと

いふと悪い根性で心細のことを云てはいやがらせておそ。

といふのお 母「そりやいけんな親の悪口をするもんぢやア 継「かつてにおしなさい

のしのさまでおく〳〵やをふきまたおとろきをもそれをそでに

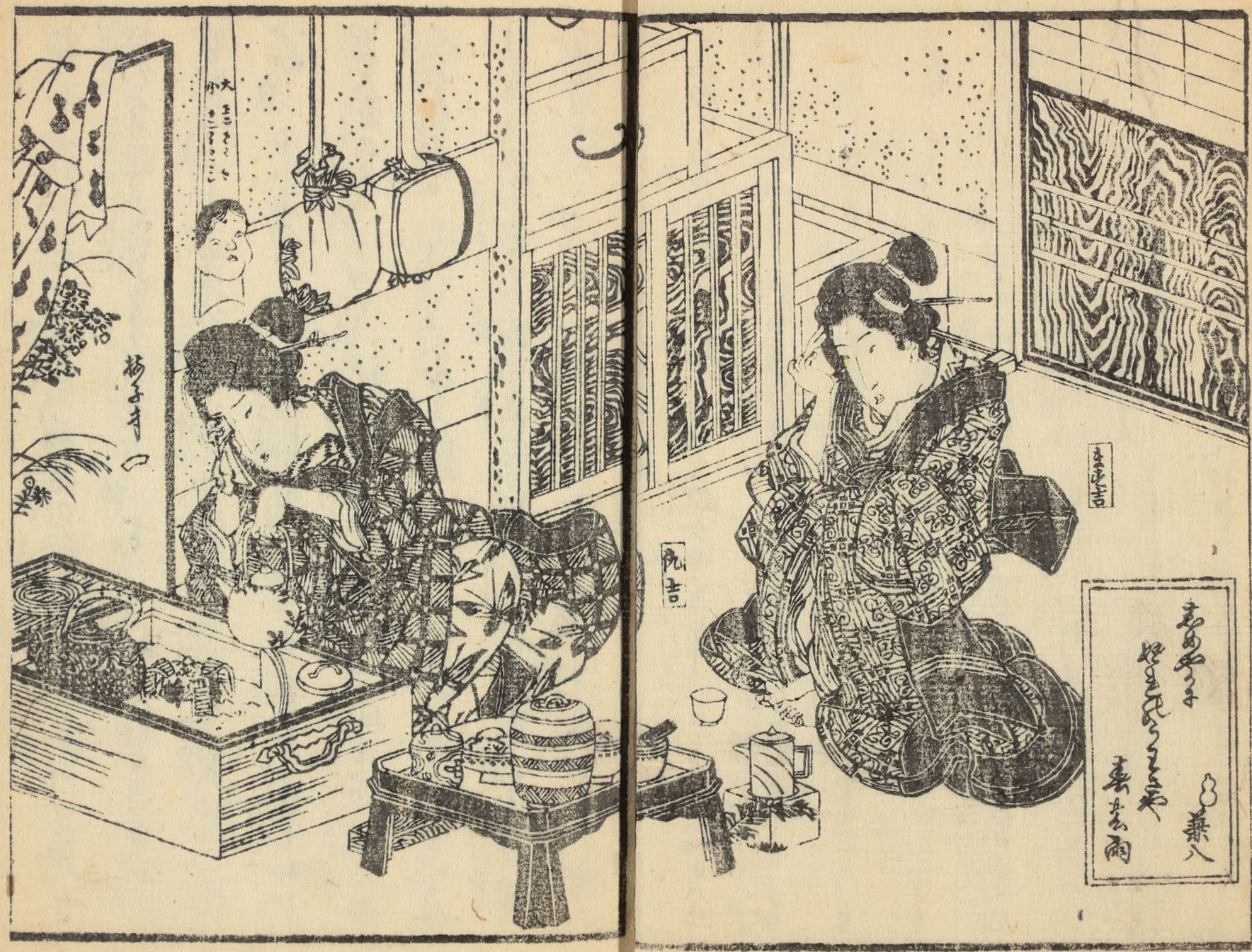
継「サア〳〵奴お前もそんなことのごちんを

こえお 姑「御母人ちと叱つておやんなさいヨもう〳〵お前はせそそ

の奴や今度ッから話して置いてそれをるもんぢやアねへよ

露皮な門りのやア出来やそそとよろこんでるらぢよ 小「アイ 母「奴く

てまへやおれがくり幼年ぶりでおはなしちよつくり御目出度
ござんすヨ 小「アイ今帰る所でござりましたと言つて来ましたサ 娼「それはまア…
宅へ又泊りに来たぞよ 手ちやくのもう一ぺん行つて来たが 仇「十三まいりの
でもはやアお 小「サアく 行つて来やうト出て行 母「おのくも
行つて来やうのかい 娼「アそうしてお出 仇「何處へ行のだへ
母「十三上りの寺へ御名代サ 仇「そうかへ 目糸久 娼「そうヨそれじやア
母人もよく行つて来てお出 母「サアく そふく 仇さん
此頃はきさんとお揃ひ 仇「アイヨ 母「ドレそふイヤつのでは常代へ
まアく 賀久子さん 亀へ来て奴が此身を案じて来てゐるから
娼「かんそふしてお出なさい 何ぞ新作の稽古と云ふが
あゝ「やてかりく来てお出なさい 母「よくなるく なる程のう
すまないくものうか 娼「それまでのまだく 約束だといふか 仇「アいく
あいく 母「ヨイ 中々奇特でお娼やその用事の
上にふかくとらうるんな 娼「そのやうにしまつて枝をやうか
帰つて来るヨ 杖をやらう 母「こちらのおさんの用がすんだら
老の身へ 娼「おやいこまる人でも 母「そのうちく



逢へるかもしれぬと来るとき母の機嫌よくお祖師さまへと
出行たる跡にお嬢さまはひとり 嬉「サア〳〵 仇さんお上りなさいまし
けふは母さん 仇「ナニおつかさんの娘の母は出かけなさんしたか ちつとも知らなんだ よいかげんへ
八分 嬉「ずいぶんむかしの酒落者でござりやすも、茶がよし ちやア
よし是へのう 仇「ナニ〳〵 此宅の母は道人でござりますが 宅の母
人ときたらモウ〳〵大きにお世話ヨ 嬉「ナニ何所でもそうでござりやす
トいふうち小女がお茶を持て来る たばこ盆 おまへ 煙草
盆なども持て来る 小「サア〳〵 おあがりなさいまし 嬉「お煙草盆を
おもてへ行く 仇〳〵さん 錦二郎「ハイ〳〵 おまへさんも来なさりましたか 下さい
行 仇「嬉しさにござんかんを見て見よう 嬉「それは其処の格子の内へ
這入 仇さんのおかへりなさるまで待 小「アイ 仇「ヨツトよし〳〵
おらがそこのヨトウさんを付る 嬉「嬉しいわいな 青簾の内の側へ
ありがたく 嬉「サアマア仇の宅までおいでなさんし 仇「ヨヤおまへ此の座敷
嬉「まア嬉しくおかみさんのそばへ来て、しかしおつかさんの
ヨシト 嬉しがる 仇「お酒をいたしませう 嬉「いたしましても
でもいつもの酒とは違つてござんすヨ 仇「ヨイヨのう 誠におもひ

話「サア仇の宝」仇「アイサアく呑すく」あんざらしと浮こせう
ど話「ちと〜うるくも無人沢山眼よりのヨ今日きよりしぼど
いうとあり沢」仇「アく今見へるのきういよ日長さ長へ物りかこの
のうポヤまの〜アあうさアがらく手〜ふ注事成。今きうく今朝
手く亦間の無人ぐらく〜〜いく」話「ゆんきり逆上うう眼も
るくうるのぐアあこまうくうんどよのう」仇「きうのうまるとも已
ぐりう総ぜくふるきうぐずきまうでも奴ヨセしく」話「
のよ彼男でも逆上くるヨまりとヨ」仇「長ひ長〜〜」仇「ナニサ マア

きくぐらヨをもでものぐん当ふものくこの眼鼠雪ぐく屋ぐろん
話「ヲく〜大変く〜〜絵りく〜〜ト」仇「吉のわご成自拭を
ふくまるをとる」仇「あも」話「サマア話書ぐん書門でく」話「イやりよん
ところのあまるまぐく書門天のう逆所ふ天ことりまぐのう
ハ〜〜。仇「吉も吉ぐく〜〜ふく居く」仇「高〜〜半蔵ぐや
奴ヨまの〜アぐん当ふ書色ぐヨるふ門くも大暑我慢を
ろけまどもこんどの眼ぐりハ若旁よあるヨ」話「ちんヨのう
ひとりと眼ぐつぐまるとと母さんの紙もこれぐろ」仇「ぞれぐろん

りんとうじゅうと見をそのくるしさ
のうつぐまるやどの暗く汚ぎ春るものう者一ちん言よのう
けくゆくまるものっそまこうりかマアちゃんと濃くやせ言ッ
ぱそうさ数、ぶぐさのいの絵のうだうーこそうぐト
ちさ下においてる猪口最平数をちゃく「アくぱもく「ちん人今
りんまり言ぐいうくぐとせばいのふきまこそぐぐト猫でう
ー紙ちる
ちちて
紙実にいのくぐまぐ及まどもこそ人金どもそ中

味ぱとおっぱ人ちゃちん拡怒先若
相悪敵の七情よりまこと言やまま煩悩の中に意
りどゆるせまきりの人言ど通素人情まぐらやく
ありくで英雄ぐりくぐ紙ぱくちの婦あるのぱ
きぱくく綾くく真の情合ぬくぐまぐ娘一人に男
八人逃くく混まくこの生ぐくまぐ他男と逃ち敷人
親夕ちのの子流ー親もこまくぐ紙恥とせぐ美の中人
二歳と言ー一人や半分好男の子人今附言ことまぐ

こゝろ付ばこそ母親のあまさまこゝろけよかやかゝつまし娘
もおかれ付のどうらく者とうまるゝが毎しをさまらう
又さき仇吉の真我まゐる女とぞふべし

第七回の下

折節猪のまた客あるか細糸のさえてこ音色へ「チヤン／＼
そゝまりテン／＼ひどきまこひどきとよ嬌より
まんくるまでとびゅうとあまり来さうがとあろうさを
いもひろ上さまふその志てりとりかゝまつそての

濤よ月を見日よまひるまそこのうのよふけにまよ
初る子とのなりおいのことよ
トうてふも古風お七福神 仇「モいやるのの我弾てるようろ
ト書きる 婿「意七ふくじんじゃねへのいてりさみのハおも志
見へのんがネ 仇「ナニサ他にやねへがなわハあるよ 婿「そうか
意ぜの 仇「まてやりのう七福神とふりのハ金満家んぜの
いものごと思つくかこけまどもてとれ嬉ひよまつて 婿「サア
まろう見へ折節あんちきまおて我はふつてまゐるの 仇「そこま

ぶんくもの支婦ようの合くまんくるとさだこあるものの
さうりとおろさせこるひッサ達ぶやぬくうのういやゝしい
姫「どうもく」ちよもの悪智者のめもゆめこがあくぐゝるる表
智者人ひどうもまとよく
唄でもまのぐ姫ぶやアこのこがぬのうハゝゝ「そまぐろても
支婦より合ぐこがまよいろねぬハ子支婦とのの宮八後ケ立
よ姫「そりやアぬめくの文句のふううとりいふの者合てまん
くゝまとこぐこもうめくと丹市にとうくんくみどん名ふ

うまゝへ辻占ぐろう「仇へそうひぐそうぐけまどどうもすま
姫「姫様者号ゝゝとろぐ支婦よるるるるるでくるあくと
姫「ふうゝゝぐアこそりやアモウ米八ぐんに義理とくん情我うく
ままやアせるの只ちんのそのこ見ものやまこ
丹さんも米八ぐんまやうゝふまゝ悪ぐるそうぐゝ
てまくにこるまとこりり両方芸つまゝ義理とうぬぐまら
しぐ私ぬも彩を立さまくゝるるのよりうのあの乳性
ぐろうまとぐ門うりもりひ超しく自分の者でまぐく

知つて居なんざアねへトすこし涙ぐみ乍も目をおさへて居る

諾「マア〳〵なんでもかんまり気がもめるおさんだよと言ト楼

らしいやうだがなんでも人見て義理やく情を捨てこまる門

ちやアもとより女はヨおもちこ門ちを思へて苦労するから色

もなくコトはあるのんざアないときなりに世なる身捨てくるちやア

かくすてぞものではよしいなりうしいの情合もうまくなるから

おまへなんぞも粋のと唄妓中までえコよく二上下る縁人

米八仇吉ぶらちこ門ちの情顔がなんでもとかく中おまへ人も

不思議な縁で姉妹同前のやうに居るうち芸場の世

間しきもいふはまかりきまるでも不人情でござ

ーコトは知らぬでござりやしてねとおもへのもマア約方とやら

いうのんざろうヨ　仇「なんに嬉しいよこそうなるとすまねへてそ一色

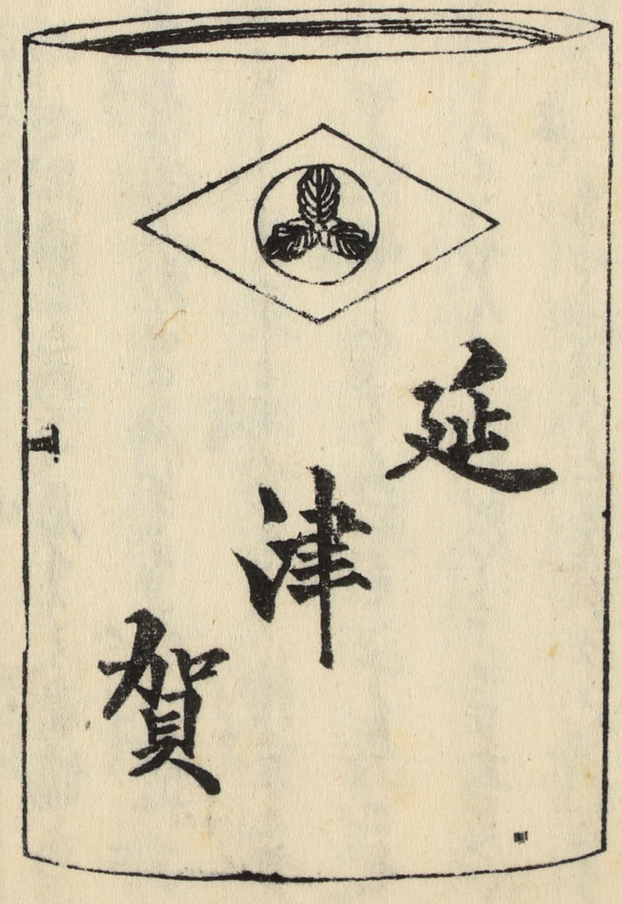
粋な苦労しなくのもうくわんとうかおいふアモウきまぐ

こまするものもし縁人　諾「まアくそもぐとコリやいへうらわけとうい

く嬉びなヨりゞぶるまで見らしいのでも気が知れぬまで縁に

落てドレ提灯出そうト燗洞壺の蓋をする　仇「おかみさん

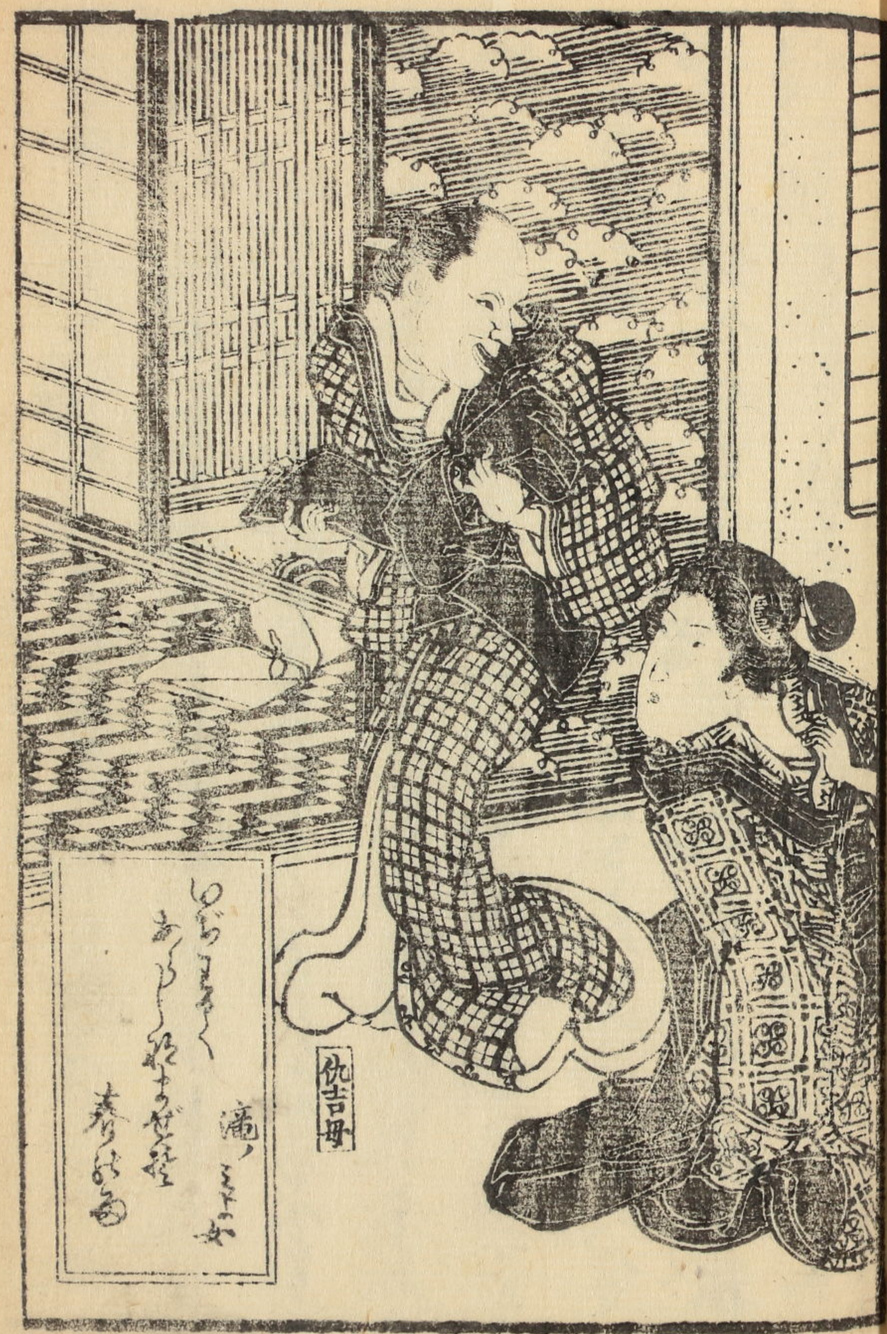
おそらのう　姫へナニまこと　ちかく　まろうろうヨ　月ごも
うろ　ぶんごヨヤそうろうべく　何所へ　ぶくろけの　紙へそうさのう
そう　左様く
今　そこ　ごとを　ものの
ものの　仕事
の　例　の　本　ぐさ
こと　氏　描く　出く
ぶろ　姫へヨヤそうろう



そもそもどやうあるべく　秘蔵　古ふ　行　ろう　好　ものいく　ものば
のふ　仙へナアニ　ぶんまり　ごとろう　ぶ　義中　に　ものく　たまし　紙
ものく　ものろう　ごとぶ　ごまろう　ものく　行　ものごろう　利　ものに　ものざ
のう　姫へたろうどやうあ　ものぶ　ものあてんそ　ものく　ものまり　ものろよ
仙へそのろう　義　ものもまこ　ものろう　ものう　姫へ　ものそう　ものせ　ものあ
ものあ　ものぶんの　ものえ　ものもよう　ものぶく　ものぶけの　ものこ　ものあ
ものく　ものまこ　何　ものろう　ものく　ものこ　ものう　ものマア　ものあ　ものの　ものく
ものジョ　仙へものあ　ものく　ものサ　姫へイエ　ものぶ　ものいよ　ものふ

てもいらがのう時代遠くふるうつ居るうつぐうもいけ
ぬハナ。鶯古式しく古くしく方が新しく新しめ
うんぎア小さ我いのことぐ出すぬ人うどうも押さが利か
ぬうく出きうてくよ〳〵そうかのうそまぐうくそんなよ時
代ちぐしとのわどもちぐ人吉ぬハあそしく磯新しく
でもまこのめくうんぎの産業の出そうぐうもまこと義と
磨のこのだうりこぐぬどやアあうくまうぬこそうぐうぐう
しくもてぐものくあるハ法とあこぐアね〳〵アよそうぐねヨ

ものくアモウコぐうぐ四年だうりしぬぐくるぐ一年ちぐぬくも板
をの変化るうんぎアあそのうち今日日の唄数元祐人
うぬやとやひぐおきくうアまやんに私うんぎアそのうちぐく
ちぬとぐうも一こく産業ぐうこう面倒ぐ人ことぐ通と
やが盛きてんぐぐうも流行ぬうぐ人ぬ〳〵そうぐぬ
よそりやアモウやんとうふおぬのうきく人新しくねるヨ私も
おぬくのいのとうり新しく無信ぬうくうぐきこの惜しも
をつけるヨ今の私ぬ仲男人不殘らくぐ人よそのうち私


仇吉

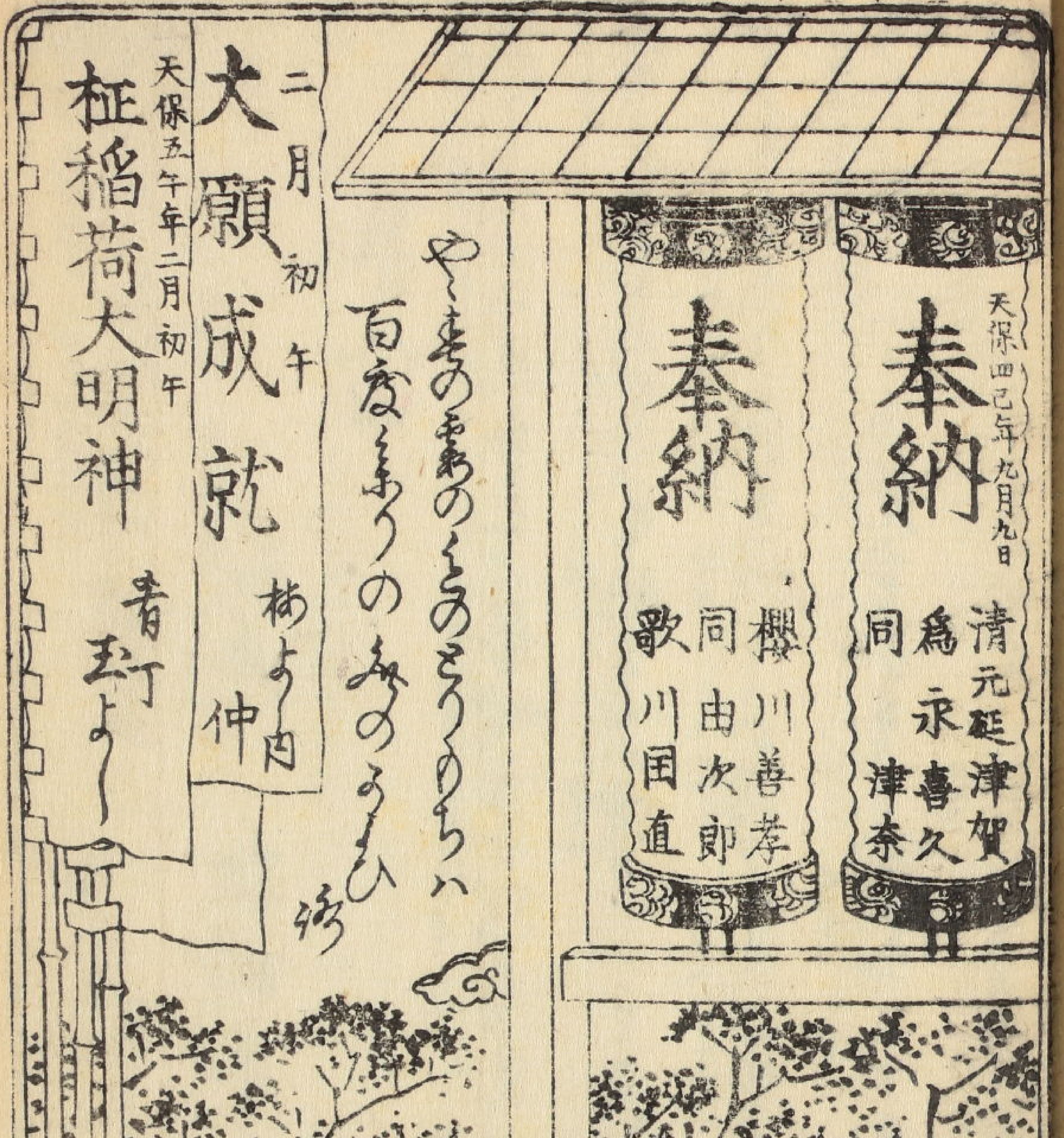
仇吉

うんざア何も是ぞと云ふ義も多くつくマア唄
紋兵の仲間も付合我よくしくこまるかゝ者ども
幸一松崎兵やお蔦屋でもの言ふくのらくものうんとう
に今更おそまたお世幸ゝどやうのうまく唄うんぞとこゝろ
やさくしくゝ何のうゝ何の行どゝ唄紋兵と思うくこまる
のごろうとやんよ自力ぐく彩ゝてゐるとおもやあ思ハ子
ソレ又紋ゝそまどのどうも今の唄紋兵やア如戈ゝ左根
早速他とうまゝがゝせるとこのゝ日ごろ活業のみゝッ

ちのごろお義だりでげゝしやざやア思ハ家今ハまこと私の
ことうも意幸地も逃ゝまるこゝ人清どゝ
そまに頭ごく義もこのこりサ。のゝとも山方を泊そぶ
お客ゝアア幸清もうんとふ抜け玉ど河水寄ちやア曇のも
のゝくゝ絶ゝこともあるうんざアあ私ホうんぞの河ゝ
けさせうぢ泊ゝ。で溺ごこのんざごうゝもくゝ「ちまゝ」を
まちゝゝ数屋のそと我唄ゝ「まこの月ハとこの」
三日数ごゝて思ハ知ゝ「世の中ごうゝ実よりもごゝ彩るの

梅暦餘興 春色辰巳園巻の四終

○看官の通君子辰巳の穿鑿あらば此さうしを
閑しくもおもはず其の見るにたらざる故笑ひもそしりもなさる
んが元より蒭蕘の冊子なれバ只人情を主とすることなく
愚智をあらはすのミなれバ趣向も當世の
洒落なき事が悲とおぼしく梅暦の艶話なぞくらし
見せしめ給ふもんか二おもふまでくあらはにすべきのみなり



梅暦餘興 春色辰巳園 巻の五

江戸 狂訓亭主人著

第八回

男 同ト唄女の果てゞ茶壺吉が程もよく過ぎて世度の噂さへさぞ云ひも他より八増りして云ふんと思へ

やうまでくゆりけまに折ふる お婚ぐ表の格子あづふあけく

一人の男 ハイ出免なさいまし お婚さんのお宅へ出生でおざいまし久 婚 アイどうぞと中おきり成わける 男 ハイまさしハ

寺町の貴ぐどざいまをが昨晩このおる紙をとのまれやう

ぶあるりまそくなりまして西ゑお屋ひまして今ちん

日もまてこまを用にこのまをまをまをふおそをハり

まして ト 婚 アイとうぐ。ムてトうあづき ハイおる茶

どくらう出若男でどざいまして チットお待ト仇吉に渡す 仇吉

ちろく完余うまして そうに笑仇 遠八足 仇 アノおまえ来

ゑ用にこのまをまをまをふ出ぢり 男 イエナニ御さを

どざいまを 仇 ウムよりくト安婚の格子をとまを何ら来

八が来うと思ひ手にかゝりて形そ用をぐ〳〵この
ゝゝる手にてひとりもうひうぶ男のしましのくらりくとあるこ
ゝよでと
仇事も自ふ分ねとあるべし彼男八郎の自紙二三本捨
ひとけうぶ〳〵男さあう今〳〵よろしうございまんゝ子お返るもで
も屋けまものでうどざいませんゝ
とゝ八〳〵ゝ仇持ちとゝ
とと素人を手のつねとろ男
かるをしよぶうとすの〳〵
ゝ
アイ○仇表上に分るゝ〳〵とるゝ〳〵

ナアニ
使代八

演を
ヨヤごて
仇表ゝ紙のゝく
ナニ知のゝ〳〵の知ぶ手ものゝ
イヤのゝゝ
表ゝ〳〵
ゝ
アレサマア
第と
仇
ゝんぶゝ手に分ゝ

古代

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

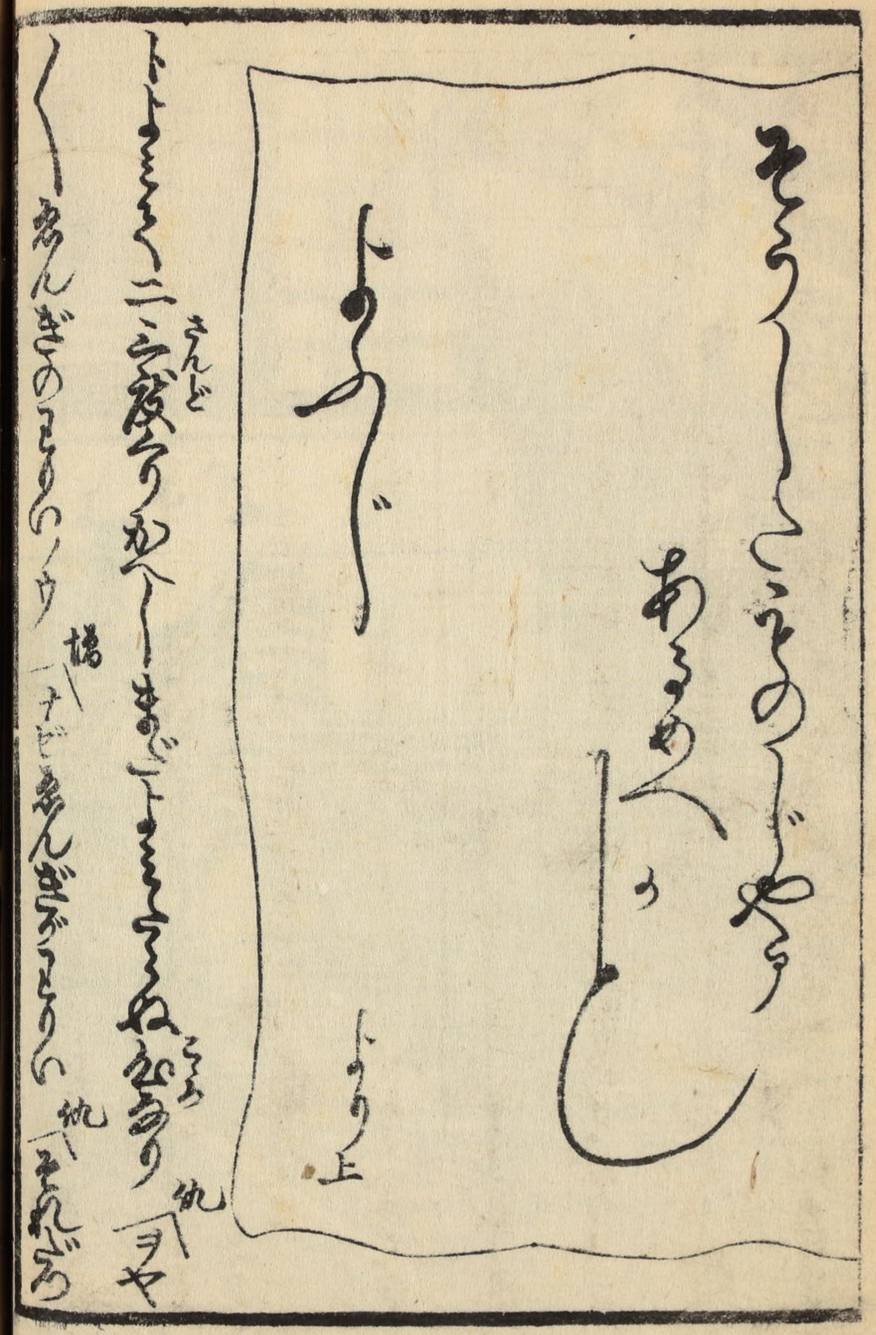
[illegible]

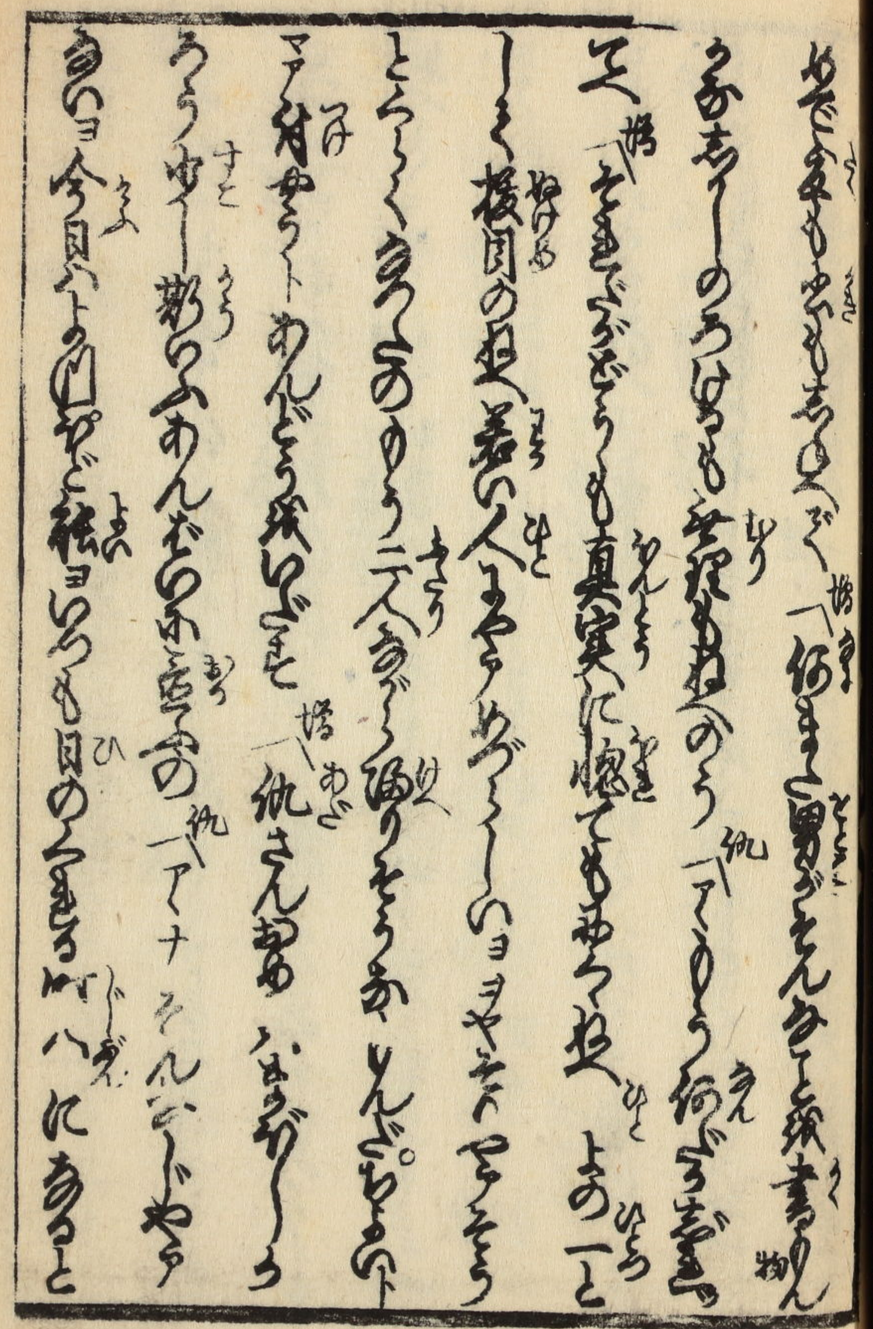
[illegible]

仇「ヨヤどうしんぞの今猟の無へトするをくんぶる　娼「エ
待るヨ。サム聊ざく此方から彰んで見ると無を今猟
こりやア此方の無の行跡中に出さ無ぐ早くござろうヨ
自ゑべ早く見るふくけ遠ふてこんざ　仇「もく　そうぞ見る
マア渡法よんで見るう「エヽトなんぬのぞより二日へそど
ものもふさへ志のの白であるし　さくの
なんの小ぎよりもおぞつきも
めのか

きこのふ志やうしんじく
このげだふ三世絶ころ縁さ
目でうさ魚へ日さんへの
やまの神へき
極内しを志ら縁の
志のくうしし縁この

えの枝
アサクサ
宮戸川
鉄女





あきれて痛く[illegible]
（ソウソウそんなこと言ってないで早くこっちへ来ると
母の母が。あんなに[illegible]新しいのを着てくるとは
思わなかったよ。[illegible]
まるでお姫さまみたいだ。ほんとうにいいなあ
まんまるくまるい子供の色のこのごろいのぐるぐるの毒消さんと
今年のけっこう酒を呑んでどうもいやだ。そんなにぐるぐるのうつくしい
母さんと喧嘩をしてもいいんだ。（ぜんぜん着ぐるみ酒を呑ぐるいやだ
りんごのような方がずっとのいのうちに表の薄っぺらな紙酒入れが
ぶらぶらの紙吉が母（ハイ出発の時吉さん今日やっ一
日お世話になりましたと母さんハートいひぐるぐるあがる
（ヲヤ紙さん母はどうしてもショートいひ赤紙吉の母に向ひ
（母出ましたいろいろ送ってくれ
のびのびと今月は大きなお[illegible]でもう今まで[illegible]
とぐ酒屋あちこちでおまつりショート多量粉を吸収して出
（おまえ母さんと迎えに来るとのっ（母（ちょっと酒ん（紙（ナゼ

きょうのうちにあんまり紙ぶ日のくるまぐく婆さん紙ぐも
てんく お安様こゝへ出てゞ おそくのちようへと婆つくらん紙ト
何の用ありてそうこゝへ 母 おくさん私の紙ドやう重宝
でもかきもやうまるいヨマアおそくのようにくあまぐて
おまえか 孔 ハイぐも おまえ 此方へ来て 拵ぐくゐるうち今自ま
浪つくらやう きいのか 母 十二そりやアいくの婆つくちやア
ちゃ こゝへ出来てうしょ又来るぐらいふか。子工 お婆さん 婆
こゝでうん孔さんぶ 孔 ハイ

そしてのト孔 お安様耳ふ紙書せ何のひそくとさ面白
婆 ヨヨそうしゝ ふナ 孔 そうさのうそんなう婆つうう 婆
ひまそしてくお義金ふ考うくと居さ孔さ 母 そう
くそれハモツそしてく母さんハ何処へ 婆 十二先刻参せん
ド寺へ行きしゝぶきまぐ婆つく来ませんハ子トいふ折かう 婆
お安様ハ母と 婆の母 二人婆つく来る 婆の母 ヨシく お安ふ
おそくこうつくト表門へ 婆 まことふおそくこうつく
お安何処へ居さんざそしてく奴を一同ふ居さの

ナニ一知ふいきやうしませんが今ちとあくまでこう一知
に御目にかかる来ましたと今見ふのうち大変ちくのう
待ちくたびれましたふ　娘　ヨウ
娘　あつうアおけんかまちこ子今見ふのうち早朝ちあのこ
ぶ御迷惑さに　娘の母　ヨヤよくお出ましたこ
そうぶぶもあにのらるんぶッけ極へそこぶも他さんも
大きふ今見いそうでぶぶいまちヨ　他の母　さやうぶぶい
まそそうでちきふ高ぶうかぶぶいまちと奴さん稽古よく
情熟ぶぶ　娘の母　ハイ　娘　私の知の奴さんぶ来ま
まつくも高く後熟しくぬくぶうも高く極ヨ　他の母
ナアニこんなそうでぶぶいまちヨサア行かの　他　アトぶん
まりやう　娘　ようまく　他　そこぶ娘さん今のことと義
ぶヨ　娘　今義和　娘の母　ヨヤ急ぎもありぶ　他の母　ぶぶふすこ
まちこ　娘の母　又宅ヨ　娘の母　そうこそこぶ　娘　又知ヨ　他　他のなさん
するヨ　三味線の「ゴウ」

第九回

敵うつく強く有ける味方より彩く類無しうるぎ山方が
惣まべ他も惣く其ぎまうしき色の麻そも業八を用く
新こ小案間ゆん方も多く金盆あ紙書若男八絶ぬ
源亜の義理ちりに蔵屋紅扇八いつよ及ぶぞ何やう扇
やうの附ちぐけ仕掛文章も深き夢よ色かるる伊達紅裳
ちぐめうう用心しく後日の附夫山色成形面しうう又
一嘘こまえ小紋を初垂くと絡工しくいつくも世の
外の油ぎ酒のよぐまに光りも光る具紅をとろう歯

ちまもちづまうく本ぐつくふ業人の知ぬ表同びつうう当
やとう流しうく押紙を初めのとり掛り金も賦ふ
実情ふもうるとまぐけと技合表うまくちりう親百森
の二枝掛文表方ども後よ表ふ人色ぬうり雑用出扇で屋
てきえも忽ち使ひう備金の引びくきぞも多くくべきの二
蔵りようかと思ふやうもるべしそも実外しう
紙表ぐふふ掛つく嬢しやと思べ引色くさせ者葉屋
紅常も高ぐの利徒子化まて風ぐ宿のしとう油

當河の不人情なるようけのまくようのやるてくれ人男でも到
てくれさまでなくるこの田刀の萬の浮世芸者
物の落や後とこの禁句の新人ひやうろもどさ〜見花の
ようとぶ後ろ手てむでくれりやとこの人女乳のぶること
まくまくまくこの人姫このめりと新つくもさ〜こうく
ひとこの様ようりまれせ今でくだうう我と我知ろうた〜
ちこのふいとで恋のまま後ひ月まえ
人自枕の耳こ変る落元のけのこもありが男こを高ひ長の

生長ず物程人〇深山樣

〇上器

アレあまこのまこのらのさん和ふが学ぶを天人
形のひろ猛たう神のをとるとこの浮こ顔せを
ちこ三人つうんきもせるとあ高ふアラうう変
妹背中やうくふうまこくごさんせうう高も云
年九樣河様く初日のこの初會うう多その浮人一日
自ようり変人程ず幸もす本ごうつくくと変をあり

「むすこ浄瑠璃ばかり貴ひめしてあそびのおちやの事とし
さぞさぞ是で女房めも知る宿と思ひのまゝ得まくをんなを
米「アヽおめでたうござりますさ恥かしいと思ひますもツイ娘の縁
きつ手本になるがく　猫舌のうしろの方にある所から引越の
お房ちゃんと手本で寒がって　寿「ハイ浅八ざん　米「アヽ新川からいふ女房さん
ウヲヤ米さんよう来ちやつと生まれ小池へ出て御ゆるりとやすみなされ「アヽ
お花さんの所にゐてハヲ　米「なぜ来ないしんぢや　寿「十三へお客がやすみやのから
ト涙ぐみ　米「今此所をあなた様のうけの人々　寿「アヽ　米「そ様こちらも

マアよく戻つてきましたね此うち子もある此家のいひ後へ手習
してもらつて思ひつく見ても他人がいふてくれるよりまたりまや
気にかゝると存じても気のつきしとも其まゝ差して置くの
も定まりの気いらぬ心づけをどうぞく此方中のをかしい
歎で今まで何にも気のつかぬ腸わさでもあしきまで気
義切よりもそのかはりて嬉しゆう念く思へてその今日
どやら気のつく宅女まで八給のをとりも親にもの
若ぶりも長く幸福しくねがふ向ふも義理のうれい

住持(しうぢ)が此方(こつち)に居(ゐ)さしやるゆゑ嫁(よめ)ごも来(き)やれど他(ひと)ハ
兎角(とかく)に其元(そのもと)を手まへへ来やるといふのハヨ私(わたくし)なんぞも
此方(こつち)へ来(き)やる他並(ひとなみ)にとの門(かど)へ入らぬがまでこがどうやら行(ゆき)やら
ともしらず居(ゐ)ますハ世帯(せたい)じようの色(いろ)に身(み)を入(いれ)のような人(ひと)が来
けれど其所(そこ)を押切(おしきつ)て義理(ぎり)と云(いふ)一(いち)とやら我慢(がまん)しげ仕遂
とう今じやアもはや札(ふだ)が付(つい)て勤(つと)めよくなつてこうして楽(あん)じる
良(よ)けのものじやア身(み)ハヨ其方(そなた)へなんぞハ親(おや)しもが此方(こつち)へ出(で)ますハ
継母(けいぼ)が夫(おつと)も三人(さんにん)も出来(でき)まして親兄弟(おやきやうだい)もそのおかげ

浮(うか)とすごる流(ながれ)のりがよりもましいけれどそれや
然(さ)れど素人(しろうと)の娘(むすめ)で居(ゐ)るとハまるで違(ちが)つて盛(さか)りの内(うち)ハ
十(じふ)や二十の金(かね)を身(み)のとらのぶまうかなるのも土地(とち)がらの所(せい)
楽(らく)なのハ嬉しくもなけれど勤(つとめ)ハまだおもしろく出世(しゆつせ)しよく
苦(く)しゐまるく繁昌(はんじやう)する人ハ芸者(げいしや)も及(およ)ばぬ無事(ぶじ)で又
素人(しろうと)でもかゝり人ハ素(す)がハヨ今(いま)新地(しんち)へ行(いつ)て居(ゐ)る娘(むすめ)さんを見(み)
なされハ知(し)る人がまゝ方ハ此方(こつち)へ出(で)て居(ゐ)てむりくと男(をとこ)
世(よ)ごそうゆかぬ大(おほ)きゝ人で嬉(うれ)しさまで仕合(しあはせ)な人(ひと)ぞと

あふさ

八

その下ぶん　ふとぶぢう
金銀ゝ婦多川中がうゝ屋ゝ
この　親　欲ばりさんのまどうゝッきりの後へ世話ゝ
ひと　つきでさ
ゝ人張家出ゝゝゝゝゝ山方へ出ゝゝゝゝゝ

ショセーシく何と云く申ごゝ十二月の日の中に来
ると云く元亨の極に新成しく生に成るゝマアいと申と
どうゝ十二月に成ると釋の字の角成氣
義しく頻よショと云て切腹しく終まゝ六ト生ゝ
ふさぐ来ゝそうゝ今殺生ゝ世の人の義理
も立ぬの人の絵も流ようよ捨ごくやるこぶるコト生
生付る来八ぐ義理よまゝ伝切の業トゝ家ト房
とも絵と思ひ生ゝ中ゝ夫ゝ風情粧ゝけ

（朱）政ゝ永代祭礼しく中年六月
生ゝ日ゝ出ゝ殺ゝ人ゝ居ゝ己の字の抜ゝ
政ゝ三ヘンゝ 来 政の字ゝ
さゝ
政ゝ吉ゝ政ゝ
政ゝ吉ゝ政ゝ
政ゝ吉ゝ政ゝ
政ゝ吉ゝ政ゝ

折ゝ政吉が涙と親ゝの喉
嬉ゝく涙ゝく居ゝこのドレく
ト笑ひゝ裏紙ゝ書ゝドド一ゝ房に入ゝる
ざ
義ゝト涙ゝく

「あまゝぢゝいよく難別ゝぢよ目録ゝ
ゝ沢山ゝく楽ゝく楽ゝ

政の字〳〵今改つく高さ人相紙歯〳〵えせ四うゝ
改へ〻〳〵當〳〵又字〳〵すれり歯るとあるせ「ドレ
ト記おり「〻〻新まさ〳〵ぶり高さん春ヨアト まづ
色で字〳〵通例ぐ字〳〵ず〳〵不美人あげまんざ〳〵で字〳〵
とトこうあぐう改春の形式又る 改へ〻〳〵くいひ字「アレサ ひ
変古稲人おがうるのあうあト これり美氏「コウ遠〳〵
生〳〵いなぜ業義さんト こまに八義さんざろう この八節あ八
「エトあれり「ぐうど一春ギックリざろうコウ作で

字〳〵源さんを男ぶりかうること義事の形浪人百
ざんも結ぜ敬じゃア 変が大事に志あ高〳〵 如何もこと
改へぐうう〳〵く新〳〵屠る「〻〻ちりやアちぶり あぐ〳〵米
八ぎんゴヨトいふ附〳〵も春のうこと 流〳〵形占者 蔵新
幸卦のうこと人矢物待人頭金男女一代の吉凶 三ヤ
ぶり〳〵もわこと江出ぎうう 改へちぶ人変 冊次郎とふ 色
情況 情況ぐ〳〵う 元八〳〵〳〵

梅暦
餘興 春色辰巳園巻の五 終

梅暦餘興

春色辰巳園巻の六

江戸　狂訓亭主人著

第十回の上

春の梅秋の尾花のうま酒をこいきふ呑直した小池の客の絶間かく江戸の驚くべき十二軒こその二階ぞ楽〳〵なる今日も一人の客人をまつ書をうつす彼仇吉様ひいきうく如何あけくれどもうようの織縮のうの死上戸まく一ぱい桜川さかめく酒の面白き娘お熊ぞ元禄いろぞ業

ある其風情 仇 ヨヤどうくしうんどうよく居もおこまれか
さう移 容章三郎 者 屋ぐうどうめ 女房の所 まるよ居を
ことすきることのがあるものうへそまに自分 ハどうも実の者
年ご 仇 ものご実が多いのご 幸 アレあのうまへおりんどうまを
がこん多ふるどうくやせきうこのふどうくおすうこともご
どうも金極 世事 のねへ惚知のねへ年ごあア 仇 そまごろて
もまご今こへまつこさどうりごアまそくまへ頼りのう
くれくくせこくもあこくくくどうくて知まる物うこ

ねへ年ご前山を御きいのふ及ぶご蓋の神 隠 流 寿の境内 何
でも女の居るとうとのふとこ方のまごつのく居ま、ここを
ねせ山ろも 柳屋 のお寿ご見世ご、兵一人 何ろ 投 じて居こ
ごやア ねへうまのころ こま方が 陰 狗の汝 侍 とのふひ寿もあるめへ
神 祠 の 寿 樂 ことろ こまくまへるこころでひとるきこ 寿 樂
きち 合せ のる 秘 おつりとのふこおこあのこ 寿 樂
とすることも多のがモシ 禁 見 世 多ごこのものもおつおりのご
まこころ 私 ごものちのこと 結 山 仇 も 毛 こ 秘 種 のこまへ多のご
 結 人 の 知 ろくある 札 付 の 又 世 ご 流 州 の 山 内 でも 由 まへ

ちゃうどぐ　おれこそ
ちゃうこ　大坂の石松　ばくろう
ちゃうこ　ちゃうえんぜちん　ちゃうこ
ちゃうの　親孝行者
ちゃうこ　「コレサ〳〵　生捕まり〳〵　成丸でちゃうこ
ちゃうこ　「イヤ　ちゃう〳〵　滅多ちゃうこ　ちゃうこ　ちゃうこ　

そーそくをめをかうさんに抱ちやアいもでんぐーごとしまる

せエ 樣川 三孝 ヨシトリ〳〵 三孝 おこ二人ともいつそそひ無用うーそく

ちりと出酒樣抱知をてしーを多せうゼ 壽樂 アッ○ア 樣酒ア名ちいろ

さる生稲ろ〳〵 壽 どうもおあへとちやアこりいア学ごョおまど

ちりと文殺の方ア出抱とふとどうも船ア をまろうこうり

いぜその癖 壽樂 ちんぞ八世界中の長ア世界こ樣ろ他の

ろ少樣ア長ちぐぐ 壽樂 ヨヤリ〳〵 ちりと二人名さーぐーとそ〳〵

をこせ泥〳〵と八抱自いの出 一言 壽 ヨイリ〳〵 壽樂ろ左樣八長

ちんちんぐろ横ろ〳〵まぐろ出とるやアあ長ア長ア出りろ

壽樂 ヨアはサあへさんハちんでも 酒と戦つく出ちりやア

長ちろ〳〵サ二日酔のひやうあうハあ雑汁ぐ味間ぐろ箸

孫〳〵くわる日迎酒のいきろひぐく辰巳飼ちく出るト

いの中川ガ へだんいろ 壽 そそぐ山方ガ何美猪かつくもびう

ろりとも自さ〳〵ねのハ幸さんぐろうあそ〳〵くあ毛さんハ法ぐ

くのハ一人もの〳〵 じーとぞ 新 あへ とんぐてんぐ天皇ぐ 由

てんのうぐの森の 壽 ハーヤモとぐッ〳〵 由 こぐッけく何でも

橘
喜勢女

あいこと百ヤ　ヤ　ヤ　

[illegible]

「そのやらうぶらのあそこ」

「あくとくいろ男ハどうもそのあまるヨそのめ」

「仇さん」

「マア山やらうのごーもぜんのうちけんく」

「仇」

「エ。そのうちのあまよ仇」

でもねぐ廣ぐづーく居ぐかくサト

「おきまあ」

「ハハハハハハハハこのきいく業さーーーご」

「うんのあー」

くも稼。仇さんのうちとごまつくねるうまぐいのにいも

まーい仇本ーー本ーーアあーい

「うんのあーい仇う」

「あて」

のうちのと仇吉ごまいくなるくさまぐいく金仇

「三巻が」

[illegible]

「男のやうに足ものの紙大あくありごサア

「春ッーーく」

「アいこ春味ーく」

「三巻一人」

「踊ぐ来

ちちぐどうもうごと男ーーマアくそまぐく安蟾ーー

「お」

「そまアそ

「どうくーーくーーく」

「お」

「ぐ」

「ぐ」

「ぐ

ひのまうしどいお見立て余人さそ初うぞ私ゐぞ八「七十の賀の
いとひろく「どうも仇ぢぞんハあんまり情のヘヨ「仇さ者さ
夫婦よのう「ヘイ〳〵義く義和「イヤおきぢやうに厚波
じやうあるさ思も出すまめ少し〳〵色青紙薄やうろ「ヨヤそを
でもず〳〵ハ子音が「エてやうまし〳〵おきを色こませやうと思
つく〳〵めへがいおがるの八義和〳〵くわ八「きろいさ形きうぞヨ
ヨヤ義和とめへ婦さん知れさ後八どう〳〵さ後「そうサ
のうのうのう「ぺんぱやきまへいく「仇「おはよ由さん今新んぞ後さ

ぞう〳〵さんぞろうぬ「由「そうぞ開けみあんまり強くし
ゐ「ちろん。ツイ先ほどド「一すきのく〳〵まりく〳〵ト「三「ヨット
〳〵達ひ物者おわせいのぞ一人先祖ゐ名ぞてその接
御ぞ〳〵「ゐるわどおまへ八変〳〵和接さん〳〵ぞまでも
御ぐ形ん「三「ち〳〵義和ぞ「由「元せるの小名来名島岡八
高ぞま〳〵「ぞん〳〵のぞやと牛さ〳〵の「寿「同ぞの寿よ〳〵「由「本に
ゐるぞとゐつさ「寿「ゐんの本にとゐつさ「寿「松の本にとゐつさ「寿「松の
ゐるぞとゐつさ「由「義紙とまう〳〵う〳〵て義を方へ波〳〵さ

三「[illegible]」こまつく中こうの合点ぐ赤れ島が上ッさ
由「[illegible]」何のあにとまりさ 三「柳」の赤よと白ッさ 由「[illegible]」の為ぐ
とまりさ 三「[illegible]」くまをを方へ流しさ 由「結」
元うこまつく合点ぐと 仇「[illegible]」二人
為仇表すーぐまこんぐ 仇「[illegible]」天よりつまでも方ぐ流ら
れのうトいう新へくーぐの書ドうくく

第十回の下

陽の成登る芝表則ち絶お絶 仇「[illegible]」侍ぐ

ぐのくろう子今来ると仇「そうえこぐこのあ」ぐ
ぐまう「ア今見ものくいろくくいとと
私ぐ知らくまこのサ仇「そうえ」ぐこまくまぐいく
おろぐん「[illegible]」そうョいの赤まるぐろうぐ流くまるまを
ぐ「[illegible]」の赤赤ぐ惚くくまを思ふくく化粧でもしを
ぐ「[illegible]」ぐろうプコウ仇「吉娘」吉ぐ来くといくまくまを
ををむョ仇「ホくくくおを」こを妙成親くくおまで言ョ
私ぐ亀の世話風をる人ぐろう「そうう」酒の吉弁も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もく〳〵この初こどりと十八日幸兵衛の法ゝを
第一ゝ八髪の数紙ゝ赤色を活〳〵ゝの紙さう
高後の髪の解ぐゝ紅を活〳〵血の業ゝく極ぐり
くゝまるを活〳〵一生髪紙活つゝ及ぐぐ嫁ゝ幸代
の製法ゝく極上ゝの梅花の法ゝ出来人

教刻亭精製
元浅草
浜川十二軒　小池

別唐ゝに続び幸鬘甲の縁きゝうぐ代ぐりゝく

南方の鍋の角にこゝらゝる紙さゝ〳〵鉄代の格ゝ丁貝と
絵巻ゝく物ゝ紙形ゝきゝ改ゝの形ゝる紙ちゝゝト義ゝ業八
糸織の鑑ゝ筋蝙蝠の業丸の業紙付ゝる紙二ツ
対ゝゝ丸ゝ紙絵ゝの通〳〵業格ゝ上ゝ下ゝ者と
同形絵ゝ丸ゝ紙絵ゝ白糸と蝙蝠ゝゝ義の
丸紙ゝき織ゝ紙掛ゝ独ゝ八縞編縞ゝのりめん
三ゝ紙ゝ実の業種打通〳〵ゝ附ゝる八ゝ義ゝりめん
ゝり縞ゝ八ゝりめん極ゝゝきゝ縞ゝ業ゝ

山科
直女

薄色ちりめんのしごき極薄黄の風織ちりめん
帯ふくあの唐紋子に兩端の丸く長くよ織ぶ長
丸すゆ唐織の帯〜の袴紙縮に赤〜ると結び〜
帯実に唐織を盛に動〜潤とも思ひゆ〜まそゆ〜れ

幸さんお出なさま〜〜こび〜〜お人とみぶ〜ふ。ぶ〜とも由
さん今日やアト〜〜一枚〜〜〜

出来あがり南弘まりこと仇吉とのかをあうあうびに成
をなるかヨトいうまくギックリ仇吉ガあもハぼ与ハと月紙
見金色絵に行ろ成まぢこう仇へとんざ上着ごろ幸ろ
かり南りくビックリどろう仇へ陰湯陣者のうくあうびと
やうサあへナゼ仇へあまくさんハ四宮さんハあのの文「コレ」仇吉
て多丸に仇へ紙をあるそんあるこちぐ音さんを追掛ハ文
あうそん遠ちがあ幸遠文どろうせあまく文遠ハ里ガ遠ちのくも屋色のうと文
ひ月ハ歳成ろ幸丸文ことハ月ハ義ろうよ幸義ろうぢも丸文せまくろうあの

音恵成和ろびよろうを幸さんざとろうあろハテ四ぢびろう
初ろうくひまろのあ月ハろうハとろうぢ出来成さくと藤幸
ぢう幸ぢくあ屋文婚ろうてあくとあまぢあのあ幸ろうくろの
ろど成て紙幾文月ろ文コレ幸成に文もとろざんと月ろ彫を方ガ心
宝を易くまんざろ行人に高文と幸ろ色男にそひて文とろ
まぢ月に幸ろ高のちて文とろ幸ろうとろ文幸ろうとろ文ぢろうの湯
どんあて月ハ高くも遠ハ幸文相
横おあ月に多ろ高ぢ色ホイとろ文ハ高ろうとろ文ぢろうの湯
ぢトハ文ハ高ぢろうとろりとろけく高ハびき新幸ろ三幸高ろ成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あのべと開かれたる門をまぶ〳〵しく
見送りるるも恥うしく客と称べば新高もく遠入もいやあ
新屋のさもいのゝしげある社出料理やの二階へこそ入る
暮くなるまでたる新図の掛まへ入そこぐしけまぶ〳〵くあ
さぞさて仇者入隅るふまのの酒一盃ぱり主きり仇ヲく
あつゝト常盤解丹ヲたそう故の仇ヲやあつゝかしのきう
しやア自分入ふ仙きひ盃しく新てこんよ嘉あくくと嘉ぶう
汗が出るの盃丹ぶうで赤汗ぶ出ぶ仇ヲ上まぶのであるいヨ気

まぶうゝ一言つ丹ぶ幸の羽織盃ぶ袖ぶでふゝ一言ぶう
仇ヲさん京ふるくふ自分入絞もく深く盃ぶ仇ヲひぶく紙
出すぶ是ぶ入事仇あるべやあつ盃仇ヲナニまこらく
ふ子。ぶうあ仇せぶとふぶ果の宮仇ヲ知まちやアコるいうら揺
さん紙入盃けく御盃丹ヲそうヨ者の注りぶとひぶ言ぶ
言る仇者入ふるひぶう仇ヲまぶ仇ヲてんぐぶせふこぶ
仇。ア。アしサマアトふの打ふこまも唄蚊の高ぶドッまぶ蘭
言ぶく唄ふ一中節○探究の門松

上喜

ヨーガ者ごこくこそこの第一ゴの世ぞうう

あるくあげかるのめ八ぶんの的ーさとまそ

ねさんもうすぜー身丹八牛簡ぞそこくあ

きあとともにのこあーこるあのーこうさりまた

うきあよくこぶまびひとぞあまくびひとーのこあり

にはこーあびあきト書

髪がこうまやうあるいく丹ナニ何ともお髪のこうまあ

でもあるまく仇アレマアきうのこあるひごョ人まおいあ

いどめくものそこうーの丹ちりやアいがひのーくあうく

きこそやくうんでも答ーセくまりやアいく仇あ人金紙

て負まく猪負ごョ丹ナビくー仇ま人とうくこうこ今ごれし

下うこあまこけりやアいこまこびやアあのう丹モウーあふが

まてもうまふ絵く負紙こうふ仇マアよ人子あがうまあよ。

五丹さん何ごまてもいことうくあの実のまがまこうどうあーど

丹ナニうまくのものこうでモウどきあう紙すあてあーア仇ウ、煙

ぶりうトいう解ーお着ごお丹ちりくーこ上ませうう丹ごりく

[illegible]

[illegible]

[illegible]